

陳 大陸

本論文は、中国の最北部に位置する黒龍江省と日本との関わりを中心に研究したものである。黒龍江省は日本帝国主義の統治下に置かれ、制圧された時代もあれば、日本知識人の援助を受け入れたこともあった。いわば日本と特殊な関係で結ばれている地域である。近代史上において、黒龍江省と日本との間には多くの恩恵とそれに相反する恨みとが混在しており、戦争が残した爪痕は今なお多くの人々の心の中に潜んでいる。また、中日両国民の歴史と文化に対する認知の違いは、極めて大きいとも言える。こうした歴史を背景に、今日の中国と日本との関係を比較文化的な視点から考察するのが本研究の目的である。現地調査によって集めた資料から各時代を代表する事例を検証することによって、それぞれの立場から両国民が相互に理解し合えるような今後の中日関係を構築するための研究であるようにつとめた。

第一章では、初期の黒龍江省と日本との関わりを中日両国の史料によって振り返る。今からおよそ 1300 年前、黒龍江省地方は渤海国と言われ、唐王朝から渤海郡王に封ぜられ、その文化を模倣した。西暦 727 年からしばしば日本と通交があり、相互に使節を派遣する形跡も伺える。渤海国と日本の関係は歴史上において長い間、原則に基づきながら平等かつ友好的に交流を交わしていたと言える。この間、渤海国は訪日を通して日本の先端技術を学び、航海技術が大いに発展した。また渤海国は日本へ暦法や医薬を伝え、特に暦法は大きな影響を及ぼした。その後、渤海国は唐の滅亡とともに消滅し、その後の五代十国の時代は戦乱が絶えず、中国全土が混戦状態に陥っていた。こうした状況はその後も続き、相互間の経済、文化面の交流規模は極めて小さかった。再び黒龍江省の地に日本が足を踏み入れたのは「日露戦争」であった。勝利を収めた日本は、長春から大連までの中東鉄道を管轄下に置き、さらに北満まで勢力を拡張した。後にハルビンで日本領事館を設立し、日本人移民も著しく増加した。また、ロシア人を牽制するためにロシア人移民事務局を設置し、ロシア人の黒龍江省への移民を制限した。「満洲国」建国以後、日本人の大陸移民が本格化し、後の日本開拓民の逃避行による大惨事を招くこととなる。

第二章では、ハルビンにおける日本式教育の実態について論じた。「満洲国」建国以後、ハルビンにおける日本人居住者の増加に伴い日本式の学校も増えるようになり、日本人が

ハルビンを中心に行なった小中学校の設立、日本式に再編された大学の状況などをまとめ、日本国が定める教育制度の下で日本大使館「教務部」の管理下に置かれていた日本式学校を概観する。1940年時点ではハルビンに7つの日本小学校があり、児童数は5000人弱とも言われていた。筆者が通った花園小学校もそのうちの1つであり、学校名も校舎も設立当時と何ら変わりがなくハルビンの中心部に位置し、現在は重点小学校としてその名を轟かせている。また、中国東北を代表するハルビン工業大学の沿革を追いながら、ハルビンで卒業した日本人学生または渡満した日本人教授たちのそれぞれの結末を探りながら、彼らのハルビンに対する思いを解明することによって、黒龍江省と日本知識人との関わりを検討した。

第三章では、黒龍江省における開拓団について述べた。日本の満洲開拓事業の展開では、戦前から日本が推し進める海外移民の背景と方針を探り、時代の流れとともに日本人移民の変化と形成を考察した。1905年の日露戦争を境に「満洲国」成立までの27年間で約23万人の日本人が中国東北部で暮らすようになり、終戦時には約150万人に達した。大量の日本人を中国の東北部に移住させた主な理由は、「昭和恐慌」と日本の人口の拡大により農民が十分な土地を得られないということがあげられている。1936年8月、広田弘毅内閣が「20ヵ年百万戸送出計画」を打ち出し、名称も「移民団」から「開拓団」へと変わった。移民事業も開拓事業として大量移民期を迎えることとなった。黒龍江省の中ソ国境に入植した多くの開拓団は日ソの開戦も第二次世界大戦の終戦も知らされないという状態であった。事実を知った時には、関東軍と日本人役人が退避した後で、ひとり広野に取り残された形となった者も少なくない。しかも、開拓団内の青壮年男子は全て徴兵され、残ったのは老幼婦女子のみであった。ごく少数の男子残留者の護衛のもとで集団南下を試みるが、この逃避行こそが、後の悲劇を生むこととなった。

終戦の翌年に引き上げ命令が出され、引き揚げ船の出る葫蘆島港には日本人が続々と満洲各地から終結した。開拓団約27万人のうち、その帰還率は3分の1にも達していない。そして帰還者の80%以上が婦女子であった。こうした開拓民事業から日本軍国主義の海外拡大政策、対ソ防衛戦略と、その後のアジア移民に対する現地土着方針、国籍離脱方針の解明を試みた。

第四章では、黒龍江省の方正県にある中国唯一の日本人殉難者を祀る日本人公墓の由来と意義を追求し、このことが後世の私たちに何を語りかけているのかを見出すことによって戦争の残酷さと平和を望む両国の民衆の思いに着目する。省都ハルビンから東に約180

キロ離れた方正県は当時の日本人移住者はそれほど多くはなかったが、開拓団本部のある伊漢通村（当時の日本名は吉興村）が近くにあるのと、入満した当初、方正を経由してソ満国境近辺に入植させられた開拓団が多くいたため、1945年8月9日のソ連軍進攻に伴い避難民はいっせいに方正県に集まった。開拓団の青壮年男子はほぼ全員が軍隊に召集されており、徒歩で方正に向かうのは老幼婦女子だけとなった避難民は戦闘や現地農民の襲撃、悪路などで多くの人が生命を失った。方正県収容所に集まった難民の数は約2万人といわれ、その半数以上が飢餓と伝染病によって死亡したという。生存者の多くは残留孤児や残留婦人として現地中国人に何らかの形で引き取られた。そして1963年に残留婦人であった松田ちゑが砲台山の麓で白骨の山を見つけ、中国政府に埋葬と墓の建立を請願したところ、周恩来の認可を得て、人民政府の手によって墓碑が立てられた。しかし、中国が日本人殉難者のために公墓を建立した意義は、中日両国で一般に広く知られることなく、2011年、中国黒龍江省方正県にある日本人開拓団の共同墓碑が破損される事件によって、中国国内のネット上で論争的となり、中国で多くの若い世代はこの事件によって初めて中国にある「日本人公墓」のことを耳にすることとなった。この章では、歴史認識の相違によって、この公墓の本来の意義が失われたことを論じ、改めて「日本人公墓」の由来と経緯を紹介し、戦争が我々に残したものの意味を再考する。

第五章では、かつて開拓や生活、勉学または訪問などの形で黒龍江省と何らかの関わりを持ち、当地域に影響を及ぼした日本人たちに焦点を当て、黒龍江省が日本語・日本文化といかに関わっているのかを考察する。1980年に日本民間友好団体が方正県の中日友好園林を訪問した際に、当時68歳であった水稻専門家、藤原長作は園林内の日本人公墓に心を打たれ、彼自身は侵華戦争に参加しなかったにもかかわらず、中国人民に謝罪の意を表した。彼は10年間に渡り先進稲作技術を方正県はじめ、中国東北全土に無償で伝えた。藤原が逝去したあと、中国政府は彼の生前の中国に対する功績を頌えるために中日友好園林に慰霊碑を建立し、「藤原長作記念碑」と名付けた。

黒龍江省と日本の交流史を辿れば、まさに波乱万丈といえる。新中国成立後、その関係は中日国交正常化によって中国で最初に民間の中日友好団体が出現したことを皮切りに、残留孤児帰国の現象、日本文化に接触した若者たちの間に日本語学習の旋風が巻き起こるという形で、多くの人々が日本への留学に関心を持つようになった現代に至る。

本論の願いは方正県の中日友好園林の中にある「和平友好」記念碑に象徴されるように中日両国の平和かつ友好的な関係を永久に保つことである。

歴史の観点から見れば、黒龍江地区から日本までの海上往来の最短距離航路の開通により、黒龍江地区と日本との文化的交流や両国の民衆的友好の基礎が築き上げられたと言える。だが両国の交流関係は常にスムーズな状態で行われたとは言い難い。この期間の史料をまとめることによって現代を生きる我々が必ず何らかの啓発を得ることができるし、これらの啓示もまた将来的な国際コミュニケーションの不十分な点を補うことができると思われる。

こういった黒龍江省人民と日本が更に広範囲にわたり共同発展していく時期の真最中において中日関係に再び亀裂が生じている。すなわち釣魚島（尖閣諸島）問題は両国に新たな試練を突きつけている。その影響で政治活動だけでなく、教育や経済面のイベントなども中止されることとなり、中日関係の悪化は両国にとって深刻な問題となり、発展の妨げとなっている。両国政府関係者や知識人は両国民の利益を尊重し、局所の争いで全体の利益をおろそかにしないように務めなければならない。また、教育面において永久的な友好関係を持続すべく、互いに心から友好関係を促進できるような人材育成をすることが共存共栄の第一歩と考える。